わが国におけるイスラム研究 (承前)
―― 中西亜篇 ――

羽田 明

わが国における中国イスラム研究の開拓者であった桑原隲蔵博士は、中西亜のイスラム研究においても、先駆者であった。1907年(明治41)の「紙の歴史」[1]では、唐側の史料にもとづいて中国の製紙術の西伝のきっかけとなった唐・イスラム両軍のタラス河の戦の経緯が明かにされているし、「波斯湾の東洋貿易港に就いて」(1916)[2]では、やはり中国史料を援用して、イスラム時代以前にはヒーラがもっとも重要な貿易港であったが、六〜七世紀にはウボラやバスラが発達し、九世紀の半ば以後はシーラーフがほとんど独占的な地位を占めるにいたった事情が述べられている。この論考は、1914〜17年、のちに一本に纒められて東西交通史の名著と謳われた「蒲寿庚の事蹟」を博士が史学雑誌に連載されていた当時の副産物で、その要点は本書にも摘録されているが、別の長篇の力作「隋唐時代に支那に来住した西域人に就いて」(1925)にも、北宋の畫家米芾の祖先を唐末に中国へきたイスラム教徒の子孫とする所伝に関連して、中央アジアのイスラム化に言及されている。

桑原博士についで中国イスラムの研究に手を染めた桑田六郎博士は、「回回に就きて」(1919)において、回回(教)の名称が回紇に由来するという通説を肯定しながらも、その間に直接の関係を認めず、回紇がウイグル族以外の民族も指すようになった金元時代以後、とくに元の世祖の治世におよんではじめてイスラム教、イスラム教徒を意味するようになったものであろうことを主張された。また、「回紇衰亡考」[3](1928)では、宋代の文献に依って、中央アジアにおける最初のトルコ系王朝カラ・ハーン朝の発展に関説されるところがあった。一方、羽田亨博士は、「西遼建国の始末とその紀年」[4](1916)において、遼の皇族耶律大石が(東)カラ・ハーン朝に代わってカラ・キタイ王国(西遼)を建設するにいたった経過を考え、遼史の伝える年代の誤りを正し、「帖木児と永楽帝」[5]では、東西の史料に依って、両者の交渉を考察した。また、和田清博士の「兀良哈三衛に関する研究」[6]には、明のハミ征服の経緯が詳しく説かれているし、「明初の蒙古経略」[7]では、チムールと元裔Öljei Temürの関係が考えられている。なお博士には、いずれも明代中央アジア史に関係の深いMeklins(七克力)やOirāt(瓦剌)に説きおよんだ論考[8]もある。

次に西アジアに関していえば、マホメットの生涯は早くから世人の興味をひいたようで、前世紀の末から今世紀の初めにかけて、いくつかの伝記が著わされた。しかし、またいずれも欧人の著書の飜案で、学問的な価値はない。わが国における西アジア=イスラムの研究が、ようやく、その黎明期を迎えたのは欧文からの重訳にもせよ、坂本健一氏の最初の邦訳コーラン(「世界聖典全集」本)が公刊された1920年以後のことといってよい。1921年にイスラム法制の源流を考察したのを手はじめに、その後十数年にわたって、イスラムの史学・地理学・法学・音楽などを研究した飯田忠純氏の業績[9]は、まだ根本史料の研究に

はおよばなかったとしても、当時としてはもっともすぐれたものであった。

すでに中国イスラムの研究についていったように、1936～7年ころを境として、わが国におけるイスラム研究はにわかにさかんになった。中西亜のそれに関しても、多くの著書・論文が現われはじめた。それらの大部分はなお概して紹介的ないし啓蒙的なもので、学問的な価値のあるものは少なかったが、一般の関心を高め、やがて本格的な研究が進められる機運を醸成するに与って力があったという点で意味がある。

まず中央アジアについてみれば、1941～42年、植村清二氏がチャガタイ汗国史のすぐれた概説的研究[10]を発表したが、このころ、佐口透氏は、東西の史料を駆使して、モンゴル時代の中央アジアを取扱った一連の論文[11]を公けにし、チャガタイ汗国の成立・発展の過程を論じ、その内部状態を明かにするとともに、イスラム史的側面にもふれるところがあった。

チムール朝時代の中央アジアについては、先の羽田博士の論文が久しく唯一のものであったが、このころになると、明側の史料をもととして、チムールの勃興と明の西域政策との関係、その後のチムール朝と明との交渉を考え、両者の使節交換の経済的意義を論じた村上正二氏の論文[12]、チムールの自伝と称されるMalfzat-i Timūrīが偽書であるべき理由を説明し、チムール朝史研究資料を解説した植村清二氏の論文[13]、シャー・ルフの使節の報告を利用して明代社会の一面を明かにしようとした宮崎市定博士の論文[14]などがあいついで出た。シャー・ルフの朝廷へ派遣された陳誠らの使西域記は明初の中央アジアの事情を伝えたもっとも重要な史料の一つであるが、もとは明実録から抄録された数種の版本によって知られていたにすぎなかった。神田喜一郎博士の書誌学的研究[15]はこれらの版本の系統を明かにしようとしたものであった。ところが、1933年に、西域番国志と名づけられたその明鈔完本が、一行の旅行記（西域行程記）とともに発見され、やがて北京図書館善本叢書の一つとして影印公刊されるにおよんで、これまでの疑点が氷解する一方、新しい研究の対象になったが、この点についてはのちに述べる。

このほか、回回館訳語の語彙の研究から、元明時代を通じて、中国とイスラム諸国との交渉には国際語として、ペルシア語が使われたことを論証した田坂興道氏の論文[16]も注意されてよい。

16～17世紀（明末清初）の中央アジアについては、東トルキスタンのイスラム化からはじめて、いわゆるホジャ（和卓）政権の成立を論じ、それが中国イスラムにおよぼした影響にまで説きおよんだ筆者の論文[17]がある。最後の問題は西北中国のイスラム都市西寧の地位を考察した論文[18]でいっそう詳しく論じられているし、清朝の回部すなわち東トルキスタン統治政策はまた別の論文で取扱われている[19]。『支那周辺史』下巻（支那地理歴史大系・第12編・1943）に収められた「トルキスタン・近世」の概説は、これらの研究が基礎になっている。

次に西アジアに関していえば、もっともトルコ語に堪能で[20]、アラビア語にも通じた大久保幸次氏は、1934年、『東洋思潮』のうちに、要領のよい「イスラム教」の概説を発表しているが、38年に設立された回教圏研究所の所長となってからは、『回教圏史要』（1940）、『概観回教圏』（1943）などの概説書を監修したほかには、学問的業績としてはコーランの訳注[21]があるにすぎない。しかし、同研究所に拠り、大久保所長を助けて活動した小林元氏は、アラビア語史料にもとづいて、精力的に研究を進め、マムルークMamlūkとよばれたトルコ族奴隷の実態[22]や黒人奴隷Zanj の称呼の起源[23]を考え、あるいは、

10～11世紀に商業都市としてもっとも栄えたイラン西南部のal-ahwāzの都市相[24]を検討したのをはじめ、もっとも多くの業績をあげた。居城基氏もつとにアラビア語を修め、イスラム社会の研究に志したが、アラビア地理書・旅行記についての紹介的な論文[25]を発表しただけで終った。やはりアラビア語を学んだ井筒俊彦氏が、欧人の著書ばかりでなく、原典を利用して、11世紀までの代表的な神学者・哲学者の思想を中心に、わが国における最初の『アラビア思想史』を著わしたのは1941年のことであった。このほか、八木亀太郎氏はイランにおけるスーフィズムの発達を考察し、tasawwuf的信仰に経験的・感情的・思想的・倫理的の四時期が認められることを説き[26]諸井慶徳氏もスーフィズムに強い関心を示した[27]。

この間、西アジアないしイスラム関係の多くの概説・概論の類が出版されたが、先の『回教圏史要』、『概観回教圏』、　アラビア思想史　以外では、イスラムの社会経済を概説したヨハネス・クラウスの著書[28]、西アジア旅行記の附録として著者独得の西アジア史観を展開した宮崎市定博士の小篇[29]がもっとも注意される。

こうして第二次大戦の直前から戦時中にかけてにわかにさかんとなったわが国のイスラム研究は戦後いち段と発達し、本格的な段階に達した観がある。

まず、中央アジアについてみれば、松村潤氏は『西域番国志』を利用して、神田博士の所説を補訂したばかりでなく、明史西域伝の于闐の条はもともと別失八里の条に属するはずのものを誤って抽出したに過ぎないことを考証した[30]ほか、不明の哈密王家の起源を甘粛に封地をもっていた察合台後王に帰した論文[31]を発表し、明代中央アジア史の研究を目指している。筆者には、清初のウイグル族を対象とした三つの論文[32]がある。その二つはかれらの商業活動を、他の一つはジュンガル王国の発展に対するかれらの寄与を、それぞれ、考察したものである。一方、筆者が手を染めた清代中央アジア史の研究は、ホジャ時代を中心に、佐口透・嶋田襄平の両氏によってさらに展開された。嶋田氏はいわゆる白山・黒山両党の分立をスーフィズムを奉じる一派とこれに反対する他の一派の対立として理解したばかりでなく、ホジャ族とチャガタイ汗家との血縁関係にホジャ政権成立の基礎を求めた[33]。また、佐口氏は、ホジャ時代の社会構造の分析から、いわゆるベク（伯克）制を官僚制と規定したが[34]、嶋田氏は、これに反対して、身分制とみた[35]。このほか、佐口氏は清代中央アジア史に関するいくつかの論文を発表している。第一はウイグル族のイスラム教儀礼を分析して、シーア派の影響と前イスラム的要素の残存を指摘したもの[36]、第二は清朝の東トルキスタンにおける農業開発を説いたもの[37]、第三はギルギズ民族史の概説的研究[38]、第四は清朝とカザーフ族との貿易を考察し、その相互依存関係を論じたもの[39]、第五はホーカンド汗国の東方発展とその東トルキスタン貿易の関係を検討したもの[40]などである。また、嶋田氏には清朝治下の東トルキスタンの租税制度が結局はイスラムのそれにほかならなかったことを論証した研究[41]もある。清代の中央アジア、とくに東トルキスタンに関する限りわが国の研究はもっとも進んでいるといっても誤まらないであろう。

最後に西アジアについていえば、田坂興道氏に常徳の西使記や瀛涯勝覧にみえるメッカの一宗教的習俗が前イスラム時代の残滓ではないかと疑った論考[42]がある。戦前から二、三の論文によってイスラム研究に関心を示していた前嶋信次氏は、中国史料・アラビア史料を比較検討してモンゴル軍の攻略によるバグダードの陥落前後の事情を考察したし[43]、つとにペルシア文学の専門家として知られた蒲生礼一氏はサーディーの『薔薇園』[44]

を訳注し、スーフィズムに関心をもつ井筒慶徳氏はマホメットの宗教的体験[45]やコーランにみえる神の主体的表現[46]を検討した。戦後、世界史の一部として、もしくは単行書としてあいついで出版された西アジアのイスラム時代史やイスラム文化の概説書のうちには前嶋・蒲生両氏の執筆・編纂になるものが多く、イスラム研究の先達の観があるが、民俗学・社会学の造詣が深く、中国イスラム社会の研究で業績をあげた岩村忍氏は要領の良いイスラム社会の概説書[47]を著わしている。

資料の乏しい中央アジアに関してはともかくも戦後の西アジアのイスラム研究にとってもっとも著しいことは、西アジアの諸言語を十分に修得した若い学者たちによって、いわゆる東洋史や西洋史の立場から離れて、西アジアの歴史的研究が真剣に進められつつあることである。たとえば、藤本勝次氏はイブン＝ハルドゥーンの『世界史序説』、イブン＝コルダードベの『道里記・郡国志』マフムード・カシュガリーの『トルコ・アラビア語辞典』などの部分訳[48]のほか、駅逓局長の役割[49]やトルコ族奴隷兵の抬頭[50]を考察しているし、佐藤圭四郎氏は土地問題を中心にアッバース朝の社会構成の分析を企てている。[51]また、中央アジアから西アジアに研究の対象を転じた気鋭の嶋田襄平氏はその最初の労作[52]においてアラビア民族のメソポタミア（アル＝サワード）征服に関連して使われた sulḥ ということばの内容と意義を再検討し、征服を武力 anwa によるものと契約 sulḥ によるものとに分けるイスラムの法理論がかならずしも歴史的事実と一致せず、少なくともメソポタミア征服当時にあっては、支配民族であるペルシア人に対しては武力、被支配民族であるセム系の原住民に対してはつねに契約によってなされたことを論証した。一方、三橋富治男氏はオスマン帝国史に関心を寄せ、イェニチェリ軍団の歴史的役割やオスマン帝国の社会構成とタンジマートの関係を考察した論文[53]を発表している。わが国におけるイスラム研究・西アジア研究は今や澎拝として興りつつあるといってよい。

イスラムの研究といえば、なおインドや東南アジアのそれにもふれるべきであるし、これまで述べてきたうちにも、取上げなかった分野や挙げるべくして不注意に見のがした研究も少なくないと思われるが、それらはすべて他日に期し、目前の責を塞ぐことにしたい。

註

(1) 芸文・2～9・10（東洋文明史論叢・1934、所収）
(2) 史林・1～3（東西交通史論叢・1933・所収）
(3) 東洋学報・17～1
(4) 史林・I～2
(5) 芸文・III～10・　1912
(6) 満鮮地理歴史研究報告・XII，XIII 1930，32
(7) 同　上　・XIII
(8) 七克力考（桑原博士還暦記念東洋史論叢 1930）
明末清初に於ける蒙古族の西征（東洋学報 XI～2、1921）
(9) 回教法制の源流、（史学 I、1921，22）
回教民族の歴史学、（史潮 III－2、1933）
回教法におけるマホメット伝研究の意義、（社会経済史学、V～9、1935）
回教民族の地理学（歴史地理、LXV～3 1935）
アラビア音楽の世界史的意義（歴史学研究 VII－3，4、1937）
中世回教徒の修史事業（歴史と地理、XXV～XXIX、1930～1932）
(10) 察合台汗国の興亡（蒙古、VIII－10～12 IX～1、1941，42）
(11) チャガタイ・ハンとその時代（東洋学報 XXIX－1，2、1942）
モンゴル人支配時代のウイグリスタン（史学雑誌、LIV～8，9、1943）
元代のタ－リム南辺地帯（北アジア学報、II 1943）

/4世紀における元朝大カーンと西方三王家との連帯性について（北アジア学報Ⅰ、1942）
イスラム世界におけるチャガタイ・ウルス（史学雑誌LⅡ-7、1941）
(12) 明朝と帖木児帝国との関係について（イスラムⅢ、1938）
(13) 帖木児の自伝について（蒙古Ⅷ-/、1941）
(14) 帖木児王朝の遣明使節（学芸、30、1947）
(15) 明の陳誠の使西域記について（東洋学報XVI-3、1927）（東洋学説林、1948、補訂所収）
(16)「回回館訳語」語釈、（東洋学報、XXX-/,2,4、1943）
「回回館訳語」に関する覚書、（回教圏Ⅳ-5、1942）
(17) 明末清初の東トルキスタン、（東洋史研究Ⅶ-5、1942）
(18) 回酋阿布都里什特と西寧、（北アジア学報Ⅲ、1944）
(19) 清朝の回部統治政策（『清朝の辺境統治政策』1944、所収）
(20) 日土協会編、土日・日土辞典は大久保氏の編集によってできた。
(21)『コーラン研究』、1950
(22) マムルーク考、（回教圏、Ⅲ-3,4 1939）
(23) ザンジュ考、（『東西交渉史論、上』1939、所収）
(24) アル・アッワーズ考、（史学雑誌、XLIX-3,4、1937）
(25) アラビア語の地理書旅行記に就いて（文化、Ⅳ-/2、Ⅴ-/、1938,9）
(26) 回教に於けるtaṣawwuf の分類に関する考察--特にakhlaqへの発展について（宗教研究、新Ⅲ-2、1941）
(27) 回教神秘主義--特にその信仰の実相について、（宗教研究、新Ⅲ-4、1941）
(28)『回教の経済倫理』、1944）
(29)『菩薩蛮記』、1944
(30) 明史西域伝于闐考、（東洋学報、XXXⅦ-4 1955）
(31) 明代哈密王家の起源、（東洋学報、XIX-4 1957）
(32) 西寧と多巴、（東洋史研究、X-5、1949）
大黄のセレンガ地方原産説について（『和田博士還暦記念東洋史論叢』、1951所収）
(33) アルティ・シャフルの和卓と汗と、（東洋学報、XXIV-/～4、1952）
(34) 東トルキスタン封建社会史序説、（歴史学研究、/34、1948）
(35) ホーヂャ時代のベク達、（東方学、Ⅲ、1952）
(36) 繼回ウイグル人の回教儀礼、（民族学研究XⅡ～3、1948）
(37) 新疆ウイグル社会の農業問題、（史学雑誌LIX-/2、1948）
十九世紀前半におけるカシュガリアの農業開発、（史学雑誌、LXⅡ-//、1954）
(38) キルギス民族学序説、（民族学研究、新Ⅱ-/、1944）
(39) カザッフと清帝国との絹馬貿易、（『遊牧民族の社会と文化』、1952）
(40) コーカンド汗国の東方発展、（東洋学報XXXVI-2、1954）
コーカンド汗国の勃興と東方貿易、（『遊牧民族の研究』、1955）
(41) 清代回疆の人頭税、（史学雑誌LXI-//、1952）
(42) 常徳西使記及び瀛涯勝覧に見えたるメッカの一習俗について、（オリエンタリカ、Ⅱ 1949）
(43) バグダードの文化とその滅亡（上）（下）（史学、XXⅧ-/,2、1955）
(44) 東京外大論集別冊乙、1953）
(45) 初期イスラームに於けるムハンマッドの原体験の超越化とその意義について（天理大学学報XⅦ、1955）
(46) イスラームに於ける神の主体的表現について（宗教研究、/46、1955）
(47)『イスラム--イスラム民族の社会』1947
(48) イブン・フルダードベのユダヤ商人とロシア商人の旅程、（東洋史研究、XI-5,6 1950）
イブン・ハルドゥーンの「世界史序説」(1)(2)（関大文学論集 Ⅳ-4,1955）
マッムード・カシュガリー「トルコ・アラビア語」辞典の飜訳（地名篇）（関大東西学術研究所・1957）
(49) サラセン帝国の駅逓局長について（関大文学論集・七十周年記念特輯 1955）
(50) カリフ・ムウタシムとトルコ奴隷兵（石浜先生古稀記念東洋学論叢 1958）
(51) アッバース朝社会の一考察（東北大学文学部研究年報、上・中、7,8 1957,8）
(52) 大征服時代のアル・サワードのスルフ（中央大学文学部紀要-/4 1959）
(53) イニニチェリ・オジャウに関する一考察（駿台史学 2、1957）
オスマン社会層位とタンジマート（史学、XXIX-/、1957）